

1 はじめに

神戸市兵庫区は市域のほぼ中央に位置し、明治 22 年（1889）の神戸市誕生の時には、東の神戸（現在の中央区）とともに神戸市の西の核となる地域となっていました。

兵庫は、日宋貿易や日明貿易の主要港となるなど、古来より日本有数の港町として栄えてきました。また江戸時代には西国街道の宿場町として多くの人々や物資の往来で賑わい、まさに陸海の要衝として発展してきました。最初に兵庫県庁が置かれたのも、かつて兵庫城が築かれた兵庫区南部（JR神戸線以南）の沿岸部地域です。

この小冊子では、「兵庫県庁発祥の地」となる兵庫区の、その基となった兵庫城が築かれたころの兵庫、織豊時代の港湾都市兵庫津の歴史を『新修神戸市史歴史編Ⅲ近世』（新修神戸市史編集委員会編）を主なテキストとして紹介します。

2 兵庫城

兵庫城は、西国街道の南、現在の兵庫区切戸町の付近にその場所を占めていたと考えられています。この城は天正 9 年（1581）頃、織田信長の命により、池田恒興・輝政父子が現在の中央区にあった花熊城の遺材などを使用して築いたとされています。

豊政権期には、城郭としての機能は廃止されますが、江戸時代初期に兵庫を支配した尼崎藩は、城の跡を利用して陣屋を設け、兵庫津奉行を派遣していました。明和 6 年（1796）に天領（幕府領）になってからは大坂町奉行に属し、与力や同心が詰める兵庫勤番所となりました。また、明治元年（1868）には、最初の兵庫県庁がおかれ、伊藤俊輔（後の博文、初代総理大臣）が初代知事

として赴任しました。

明治 8 年（1875）の新川運河の開削によって城跡の中心地はほとんど運河の底となってしまい、現在は新川運河沿いの遊歩道に「兵庫城跡 最初の兵庫県庁の地」と記された碑と説明板があるのみで（表紙参照）、城の面影をしのぶことはできません。

なお、平成 16 年に実施された神戸市教育委員会による兵庫津遺跡第 35 次発掘調査の際には、切戸町より陣屋以前の築城当初のものである可能性のある堀状遺構が発掘されました。このときの発掘調査では、石垣の列も確認され、石垣の前面には、濠状の堆積も認められましたが、これは築城当初の遺構ではなく、江戸時代中期から後期（18 世紀後半～19 世紀）の遺構であると考えられています。



兵庫津遺跡第 35 次発掘調査 堀状遺構（神戸市教育委員会提供）

3 兵庫城を築いた池田恒興・輝政

次に、兵庫城を築いた兵庫区ゆかりの人物でもある、池田恒興・輝政父子について簡単に紹介します。

(1) 池田恒興 (1536～1584年)

池田恒興は、織田信長、羽柴(豊臣)秀吉に仕えた武将で、池田勝三郎、勝入ともいい、母は信長の乳母であるため、信長とは乳兄弟にあたります。

浅井氏・朝倉氏との姉川の戦い、長島攻め、武田攻めなど、信長の主な戦いに参加しています。また、秀吉が明智光秀を破る山崎の戦いにも参加しました。

信長の後継をめぐる重臣会議、清洲会議(天正10年、1582)には恒興・秀吉・柴田勝家・丹羽長秀が出席し、恒興は秀吉・長秀とともに信長の嫡孫・三法師(後の織田秀信)を擁立します。徳川家康・織田信雄との小牧・長久手の戦い(天正12年、1584)で長男の元助、娘婿の森長可とともに戦死し、家督は次男の輝政が継ぐこととなりました。

恒興の所領の変遷については、後に改めてふれることとします。

(2) 池田輝政 (1564～1613年)

信長に仕え、初陣となった天正8年(1580)の花熊城攻略の際には、その軍功により信長から名馬を授けられたといいます。信



池田恒興像 (財)林原美術館蔵

長の死後は、父の恒興とともに秀吉に仕え、小牧・長久手の戦いで父兄が戦死すると家督を相続します。

その後の秀吉による紀州の根来・雑賀衆攻め、九州の島津攻め、小田原の北条攻めなど、秀吉の主な戦いに参加しました。

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いでは、継室が徳川家康の娘、督姫であったこともあったためか、徳川方に与します。先陣として、福島正則らとともに岐阜城主の織田秀信を攻め、功を挙げています。戦後は播磨姫路52万石を領し、また一族の所領を合わせると約100万石もの所領を有する大大名、池田氏の基礎を築きあげました。姫路城を現在に残る姿に修築したことで知られています。



池田輝政像 (財)林原美術館蔵

4 兵庫城築城前の兵庫をとりまく情勢

兵庫は、摂津国(概ね、現在の神戸市須磨区以東、淡河町を除く北区から阪神間、大阪府北部や大阪市の大部分と堺市北部)の西に位置します。ここでは、後に解体され、その遺材によって兵庫城が築かれることとなる花熊城(鼻熊城・花隈城)が築かれたと考えられる天正2年(1574)から兵庫城築城までの摂津国と兵庫をとりまく情勢について紹介します。

天正2年(1574)、信長に従う荒木村重が伊丹の有岡城の城主

となり、このころ村重が摂津一円の支配者となったと考えられます。また、花熊城が築かれ、尼崎城などとともに村重が城を預かることとなります。

天正4年(1576)、戦いを繰り返してきた石山本願寺が再び信長と戦い、中国の毛利輝元も信長と断交し、本願寺と結びます。

なお、花熊城が築かれたのはこの年とする説もありますが、いずれにしても、信長と本願寺や毛利氏との関係が緊迫していた時期に築かれたものと考えられ、その位置からみても花熊城は、兵庫の防衛拠点として位置づけられていたのでしょう。

本願寺と毛利氏が結ぶことによって、摂津や播磨の情勢も不安定になってきました。天正6年(1578)、早くから信長に従ってきた東播磨の別所長治が三木城において信長に離反します。また、本願寺と毛利氏に挟撃された摂津の村重も有岡城で信長に反し、花熊城には一族の荒木元清を籠城させました。信長は滝川一益らに花熊城を攻めさせます。また、大阪湾の海上で毛利方の村上水軍と織田方の九鬼水軍が戦いますが、九鬼水軍が勝利し、織田方が大阪湾の制海権を握ります。村重配下の高槻城の高山重友(右近)、茨木城の中川清秀も信長に降ります。

『信長公記』によると、長期化する花熊攻城戦のさなかにある天正6年(1578)11月、一益は花熊城への布陣のまま兵庫へ討ち入り、堂塔伽藍、仏像経巻を全て焼き払い、僧侶男女の別なく殺害したとあります。その背景には、当時、兵庫には一向宗寺院があり、一向宗徒たちが兵庫から花熊城に武器、兵糧を供給し、支援を行っていたという状況があったのではないかと考えられます。

織田軍の猛攻に1年近く耐えた村重でしたが、天正7年(1579)、村重は有岡城を脱出して尼崎城へ逃れ、次いで花熊城に移ります。

この年の暮れに須磨区の禅昌寺が一益から寺領の安堵状をもらっており、このことから、神戸市域の大部分はしだいに信長方の手に入っていたものと考えられます。

天正8年(1580)1月には三木城が落ち、秀吉は別所長治を自害させます。次いで7月、池田恒興・輝政らが花熊城を落城させ、村重は毛利氏を頼って逃亡します。また、本願寺も信長に屈し、法主の顕如らは大坂の地を立ち退きます。

花熊城攻略の功により、池田父子3人は信長より摂津数郡を与えられ、西摂の大半は恒興の支配するところとなりました。また、秀吉は播磨一国の支配を確立し、摂津・播磨はようやく安定することとなります。

この年には、西摂と播磨で信長の検地が行われますが、西摂の検地は恒興が実施します。須磨寺の「当山歴代」によると、検地の結果、池田殿より田一町と屋敷その他畑ばかり八反を寄付されただけなので、寺僧が半分に減ったと記録されています。

天正9年(1581)、兵庫を支配することとなった恒興・輝政は花熊城を解体し、兵庫城を築きます。兵庫の町の周囲には、その外郭をなす土塁である都賀堤(とがのつつみ)が築かれ、兵庫は近世都市として整備されていきます。

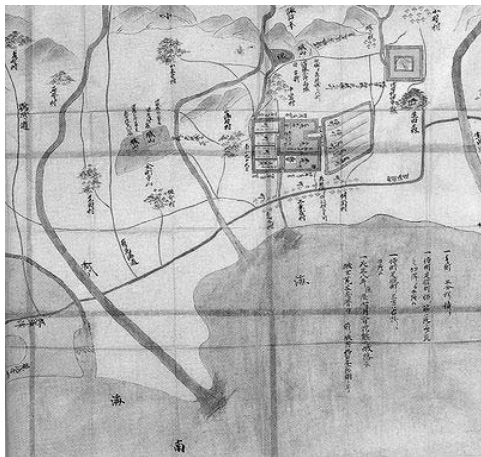
5 花熊城の戦い

花熊城は、およそ東西240m、南北170mの長方形で、東は生田川、西は宇治川が流れ、北は六甲山系の山並、南には西国街道と海が開ける



花熊(隈)城跡(花隈公園 中央区)

という要害の地にありました。輝政の子孫の岡山藩主池田家に保存された「花熊城攻囲図」には、花熊城と城下町の様子が詳細に記されています。この絵図によると、城には本丸、二の丸、三の丸があり、侍町、足軽町、町屋からなっています。現在の花隈公園の位置は本丸の東南はずれにあたり、天守は現在の福德寺（中央区花隈町）のあたりであったと考えられます。この絵図は江戸時代になって描かれたものですが、実戦に参加した記憶に基づいて描かれたものであろうことから、その信頼度は高いと考えられます。しかし、西国街道が兵庫を通るのは慶長期（1596～1615）以降と考えられることから、当時の記録に作成者の情報が混在している可能性もあります。



花熊城攻囲図（岡山大学附属図書館蔵）

花熊城の戦いで池田軍は、恒興・元助が諏訪山に、輝政は生田神社の森に陣取り、また援軍の紀伊雑賀勢は大倉山に陣取り、花熊城を囲むように布陣します。天正8年（1580）7月2日、大手門周辺での激戦の間に別働隊が搦手（背面の門）より城内に侵入し、花熊城を開城させることに成功したと伝えられています。

「花熊城攻囲図」の兵庫津には、築島寺（来迎寺）の伽藍が描かれ、そこに「雑賀孫市宿所仮屋」という注記があります。雑賀孫市は紀伊雑賀衆の有力者で、本願寺と信長の戦いでは鉄砲衆を率いて信長軍を苦しめたことで知られています。『池田家履歴略記』によると、来迎寺が援軍のもっとも重要な拠点として、激しい戦いが繰り返されたことが記録されています。この戦いで、兵庫もかなりの町屋や寺院が戦火を受けたと考えられます。

なお、享保17年（1732）の年記をもつ「花熊落城記」によると、天正7年（1579）頃の記事として、花熊城中には9人の侍大



花熊城攻囲図

兵庫津周辺（岡山大学附属図書館蔵）

将と 600 人余りの侍がいるが、それ以上に上部村（神戸村）ほか各村からの百姓が飢えと戦いながらも雑兵として 1083 人もいたと記録されています。この現実的な印象を与える雑兵の人数は、神戸村や兵庫の一向一揆が花熊城を支えていたことを示す貴重な記録であるといえます。

6 兵庫城築城のころの兵庫の様子

兵庫城が築かれた天正期（1573～92）の兵庫の様子を伝える絵図等は、現在、伝えられていません。兵庫が描かれた現存する最古のものは、元禄 9 年（1696）に兵庫津奉行が尼崎藩に提出した絵図の控えて、兵庫の豪商、正直屋に伝えられた「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」（P10 参照）です。三川口町、門口町、船大工町、鍛冶屋町、磯之町、出在家町など現在も残る町名も記されています。

また、この絵図には、兵庫城の外郭をなし、古くから都賀堤とって伝称されてきた土塁も描かれています。都賀堤の延長は 750 間（約 1350m）、幅 1 間 5 尺～8 間（約 2～14m）もあったといわれています。土塁の外側の堀は、城の外堀の形をなしています。兵庫城の本丸は海に沿って構えられており、この堀と土塁に囲まれた内に兵庫の町があり、近世の兵庫は城下町として整備されました。都賀堤とは、城下町の外側の堤といったのが、とがの堤と伝えられたのではないかともいわれています。この土塁は長く後ま

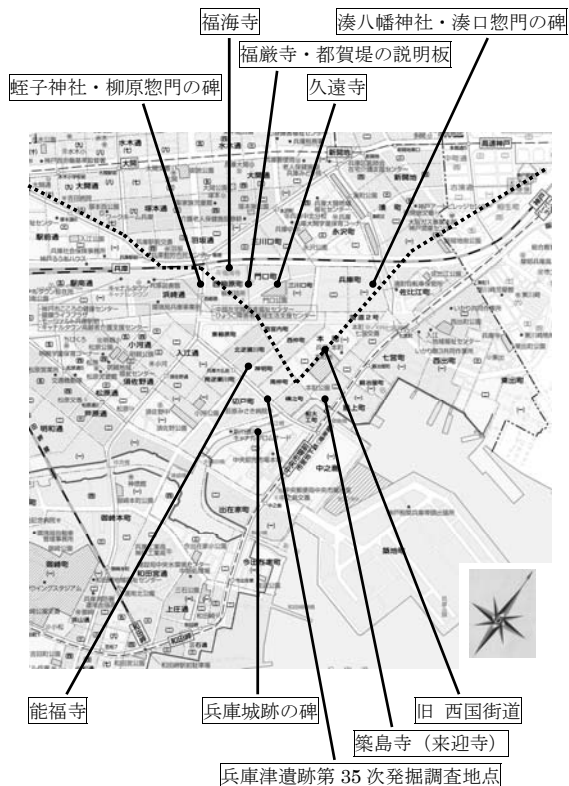


都賀堤の説明板（兵庫区門口町）



摂州八部郡福原庄兵庫津絵図（個人蔵 神戸市立博物館寄託）

現在の兵庫区南部地域



で残っていましたが、兵庫の町が発展するにつれて、明治8年(1875)にみな削りとられて平地となり、その跡はなくなりました。

土塁の内側に接して福海寺、福厳寺、久遠寺などの寺院が並んでいたのは、戦闘に際しての防備を考えたものであったと思われます。また、寛永13年(1636)に湊口惣門が設けられる湊八幡神社付近と柳原惣門が設けられる蛭子神社付近は、兵庫の東西の出入口にあたります。

池田恒興が構想していた城下町がどのようなものであったのか、史料が現存しないため詳しくはわかっていませんが、「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」に見える町は、信長・秀吉の時代の典型的な城下町の形である総構型(町の全域を堀や土塁や堀などで囲い、出入口に門を構える構造)に近い空間構造を示しています。また、近年の発掘調査により、表道に面して短冊形に区画整備を行ったこのころの町割が、江戸時代を通じて引き継がれていたという報告もあります。恒興による兵庫の支配は足掛け3年と短いものでしたが、残した足跡は小さくありません。

なお、兵庫城の築城にあたって、和田岬の方に流れていた古湊川が城下町の建設上邪魔になるので、恒興が川崎の方へ流れる旧湊川に付け替えたという説がありますが、平清盛が付け替えたという説や、自然に流路が変わったという説もあり、定かではありません。



蛭子神社(兵庫区西柳原町)

7 兵庫城築城後の兵庫をとりまく情勢

天正 10 年 (1582)、明智光秀が信長を京都本能寺で襲い、信長の時代は終わります。秀吉が光秀を山崎の戦いで破ると、戦いに参加した池田恒興は、論功行賞で摂津のうち、兵庫・尼崎・大坂において 12 万石を領有することとなりました。恒興は大坂城に入り、兵庫には長男の元助が在城して神戸地方を支配します。

天正 11 年 (1583)、秀吉が柴田勝家を賤ヶ岳の戦いで破ると、戦いには参加していませんが、恒興は美濃国 13 万石を領有することとなり、大垣城へ移ります。

兵庫・尼崎は秀吉の甥、三好秀次 (後の関白、豊臣秀次) に与えられました。秀吉は池田氏の兵庫城接収について秀次に指示し、兵庫で政道にあたるよう命じます。

天正 13 年 (1585)、秀吉が根来・雑賀衆攻撃のため紀州に出兵します。この時、兵庫より兵糧輸送船が徴発されています。また、秀次が近江八幡に移され、兵庫・尼崎などは秀吉の蔵入地 (直轄地) となりました。このころに兵庫城の城郭としての機能が廃止されたのではないかと考えられています。

天正 15 年 (1587)、秀吉の島津攻めに際して兵庫津が兵站港として利用されます。また、この前年にあたる天正 14 年 (1586) のこととして、秀吉は明石惣中 (明石村の村人の共同体) に対して、九州方面のことで安国寺恵瓊や黒田孝高らの飛脚が届いたら、夜中でも舟便で兵庫まで届けるように命じたと「柏木家文書」に記録されています。

このころには秀吉の勢力拡大とともに、支配下の大名の大坂への往来や物資の輸送が増え、大坂への中継地としての兵庫津に立ち寄ることが増加しました。例えば天正 16 年 (1588) には、当時安芸国広島にいた大大名、毛利輝元が大坂へ向かう途中、兵庫

津に停泊し、正直屋宗与の屋敷に宿泊しています。

さらに、天正 18 年 (1590)、秀吉の小田原攻めに際しては、兵庫津が毛利水軍の船揃えの港となり、その軍事拠点となりました。このようなことから、この時期の兵庫津はいわば豊臣政権の軍港としての性格も有していたこととなります。

天正 18 年 (1590)、小田原城が落城し秀吉の天下統一が完成すると、翌 19 年から秀吉の大陸侵略の準備のため、沿岸諸国での兵船の建造が始まります。兵庫はもちろんその周辺でも、船大工のいるところには船の建造が命じられたと考えられます。

天正 20 年 (文禄元年、1592)、朝鮮侵略のため、秀吉は 16 万の兵に渡海を命じます (文禄の役)。兵庫をはじめとする沿岸地域は、船や舟子の徴発を受けたようです。

文禄 3 年 (1594)、文禄の太閤検地が行われ、全国規模で田畑の収穫量を米の量 (石高) で表示するとともに、それぞれの土地の納税責任者 (耕作百姓) が確定され、村ごとに検地帳が作成されました。

神戸市域で文禄 3 年の太閤検地帳が発見されているのは、谷上村・小部村・中村・藍那村・大手村・白川村・多井畑村・西尻池村です。このなかでも、村の石高が最も大きいのが西尻池村です (約 773 石)。これは、西尻池村が海岸寄り、平野部にあたり、水田経営に好適であったことが主な理由であると考えられます。

文禄 5 年 (慶長元年、1596)、いわゆる慶長の大地震が発生し、沿岸部地域は津波に襲われ、兵庫も壊滅に近い被害を受けたと伝えられています。須磨寺の「当山歴代」によると、兵庫の町でも一軒残らず崩れ、その内から火が出て「人死す数は知れず候」と記録されています。しかし、慶長 7 年 (1602) の兵庫の町屋敷の

地子（租税）を記録した帳簿である「摂州矢田部郡兵庫屋地子帳」を見ると、兵庫の各町がほどなく復旧に向かったことがうかがえます。

8 兵庫の正直屋（極井家）

兵庫津は瀬戸内海の東部においてもっとも重要な港であったため、貢納物や商品などの物資運送のみならず、兵員や軍需品の輸送のためにも、支配者たちに重要視されていました。

正直屋と号した極井家は、兵庫区本町や付近に居を構える兵庫の有力町人で、土倉（質屋兼金融業者）などを営業する豪商であり、港湾都市兵庫津の成長を背景として、その時々の支配権力から特権と保護を受けて中世から近世の変革期に成長を果たしました。なお、兵庫には既に北風家が住していましたが、室町・織豊時代には、まだ目立つ存在ではありませんでした。

ここでは、極井家に伝わる「極井家文書」から、主として豊臣政権下の兵庫における正直屋の果たした役割について紹介します。

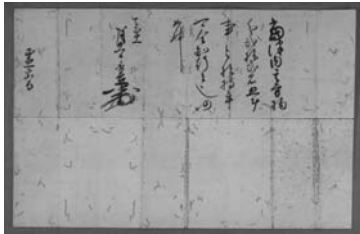
「羽柴秀吉船役銭請取状（天正11年10月8日）」によれば、秀吉はこのころから正直屋宗与を下代官（下代）として、兵庫津に入港する船から船役銭（入港税）の徴収にあたらせていました。また、「羽柴秀吉領知判物（天正11年8月21日）」によれば、正直屋に秀吉から22石5斗の土地が安堵されています。これは、秀吉のために正直屋が下代の職を勤めることへの給付で、正直屋の持つ土地の税がその分だけ免除されたのであろうと考えられます。この時期の兵庫は三好秀次領であり、兵庫が秀吉の蔵入地となるのは天正13年（1585）ですが、実質的には蔵入地に準ずる地域であったと考えられます。

なお、これ以前にも秀吉は、兵糧調達や運送などでも正直屋を利用していました。「羽柴秀吉判物（天正8年8月6日）」によると、天正8年（1580）、播磨国を領有した秀吉は、正直屋安右衛門に明石郡における金融事業の保証状を与えています。これには「明石郡借々付分」と書いてあり、その意味ははっきりしません。先に秀吉が三木城攻撃の際に正直屋から兵糧の提供など何らかの支援を受けたので、秀吉が正直屋に対して「明石郡借々付分」という債権を保護するために、徳政（借金棒引き令）の適用除外を約束したものではないかと考えられます。

正直屋は天正11年（1583）頃から兵庫の商人・職人から諸座公事銭（営業税のようなもの）の徴収にもあたっています。「兵庫町諸座公事銭算用状（天正19年12月29日）」は天正11年7月から同19年（1591）12月の間の諸座公事銭の精算が秀吉の奉行衆の一人、増田長盛によって行われたことを示しています。これは、正直屋の下代としての任務が諸座公事銭などを徴収・管理して、秀吉の必要に応じて支出する、いわば兵庫における秀吉の財布のようなものであったため、精算を必要としたと考えられます。

また、正直屋は兵庫において、屋敷地に対する地子銭、屋敷建物に対する屋地子銭の徴収にもあたっています。地子銭については、長盛によって天正19年（1591）に同年分の精算が行われ、次いで天正20年（1592）から文禄2年（1593）分の精算が文禄2年に行われています。屋地子銭についても、天正15年（1587）から同18年（1590）分の精算が文禄3年（1594）に長盛によって行われています。

「正直屋宗与書状案并覚書（文禄3年10月24日）」によれば、文禄3年（1594）に正直屋は「地子役ならびに町役の下代」、つ



羽柴秀吉領知判物 天正 11 年 8 月 21 日

(個人蔵 神戸市立博物館寄託)



羽柴秀吉船役銭請取状 天正 11 年 10 月 8 日

(個人蔵 神戸市立博物館寄託)

まり兵庫での租税の徴収の役を召上げられます。

豪商や土豪が蔵入地からの租税の徴収などの代官にあたるのは、堺の今井宗久などの例があり、蔵入地の管理方式の一方法として豊臣政権初期から存在していました。正直屋も租税の徴収の任にあたっている点で、蔵入地代官と事実上同じ立場であったとも考

えられます。しかし、文禄 3 年には神戸市域においても文禄の太閤検地が行われるなど、石高制による在地掌握の強化が進むとともに、中央の奉行制度が整備され、秀吉のもとに増田長盛といった有能な吏僚が育ってくる文禄期 (1593~96) になると、豊臣政権は信長以来の豪商代官の勢力を削ぎ、直属吏僚による蔵入地支配へと変質していきます。豊臣政権の重要な財源である兵庫において、正直屋が租税の徴収の役を召上げられるのは、こうした蔵入地の支配方式の変質に伴うものであったと考えられます。

一方、「極井家文書」によると、正直屋はその後兵庫の町において中心的地位にあったものと考えられ、文書には文禄 3 年 10 月 24 日より後の、兵庫が尼崎藩領となつてからのものと考えられるものも含まれているのです。「豊臣秀吉朱印状 (慶長元年 12 月 18 日)」は、先に紹介した慶長の大地震直後のもので、秀吉は、正直屋寿閑に対して湊川上温泉の湯壺 (坪) 執り立てを認めています。湊川上温泉は兵庫区天王谷付近といわれていますが、慶長



豊臣秀吉朱印状 慶長元年 12 月 18 日

(個人蔵 神戸市立博物館寄託)

の大地震によってこの温泉も被害を受けたため、正直屋の財力を利用して復興させたものと考えられます。

9 むすび

以上、兵庫城が築かれた前後の兵庫について簡単に紹介しました。この時代の兵庫の歴史は史料が不足していることから、ややもすると見過ごされがちです。応仁の乱の際に東西両軍の攻防の的となったことや、また、信長によって焼き討ちされたことなどから、当時の兵庫は荒廃していたと思われがちです。しかし、兵庫津は織豊時代においても瀬戸内海の東を占める重要な港湾都市であり、時の権力者から重要視されたことを少しでもお伝えすることができれば幸いです。

不十分な記述ではありましたが、今から約400年前にも慶長の大地震という未曾有の災害に見舞われた兵庫が、今日と同様に見事復興を果たしたことを紹介することをもって、この小冊子を終わりたいと思います。



豊国稲荷神社（兵庫区平野町）

豊臣秀吉を祀る神社。かつては兵庫城の地に鎮座していましたが、明治時代に湊川上温泉の守護神とするため、温泉からほど近いこの地に遷されたと伝承されています。

<参考文献等>

新修神戸市史編集委員会編『新修神戸市史歴史編Ⅲ近世』（1992年）の他、以下の文献等を参考としました。

また、兵庫区民まちづくり会議、歴史資料ネットワーク、兵庫区主催「平成21年度 兵庫津歴史講演会」における天野忠幸先生、藤本史子先生のご講演内容も参考とさせていただきました。

発行にあたり、ご指導をいただいた歴史資料ネットワーク事務局長 中野賢治先生に深く感謝申し上げます。

- ・神戸市教育委員会編『神戸の史跡』（1981年）
- ・問屋真一「十六～十七世紀初頭の摂津国兵庫津資料―種井家文書の紹介―」（神戸市立博物館編『神戸市立研究紀要第4号』（1987年）
- ・大国正美「太平の世の港町と役割」（神木哲男・崎山昌廣編著『歴史海道のターミナル 兵庫の津の物語』（1996年）
- ・落合重信『兵庫の歴史 古代から幕末まで』（1998年）
- ・神戸市立博物館編『特別展 よみがえる兵庫津 港湾都市の命脈をたどる』（2004年）
- ・神戸市教育委員会編『兵庫津遺跡 第35次発掘調査概要』（2006年）
- ・岡山城ホームページ「歴代岡山城主 池田家前史」